

7. 鉈打の婦人会と女性たちの意識

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 静香 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4936

7. 鉦打の婦人会と女性たちの意識

石 田 静 香

- I. はじめに
- II. 婦人会組織の概要
- III. 婦人学級・農協婦人部
- IV. 婦人会に対する女性たちの意識
- V. おわりに

I. はじめに

今回我々が調査を行った鉦打地区では、壮年団、婦人会、中老会、老人会などが主な年齢組織となっている。そして、その中でも特に壮年団と婦人会は、様々な地区行事の中心的存在と言える。調査当初は、壮年団が表の華やかな仕事を担い、婦人会はどちらかといえば彼らを裏で支えている、といったイメージを漠然と持っていた。男性に話を聞く機会の方が多かったからかもしれない。しかし、テーマを「女性」に絞り、女性に話を聞く機会が増えるにつれて、鉦打地区の女性たちが男性に負けることなく活躍していることが分かってきた。彼女たちは若くて、明るくて、とても元気である。人々は皆、この地区を活気づけるには彼女たちのパワーが必要であると考えている。本稿ではそんな婦人会の人々について追っていく。婦人会組織の概要はもちろん、他にも、婦人会に対する女性たちの意識なども見ていきたいと思う。また、現在婦人会が抱えているいくつかの問題を挙げ、今後の発展のためにはどうしたらよいか、ということも私なりに考えていきたい。

まずII.では婦人会組織について、III.では婦人会の一部である婦人学級と、農協婦人部について記述を行い、IV.で婦人会に関わる女性たちの様々な思いをまとめていくことにする。

II. 婦人会組織の概要

鉦打婦人会は1999年度現在、会員数153名である。会費は年間500円となっている。入会年齢と退会年齢は、きっちり決められているわけではない。20～30年程前は、嫁に行くときすぐに入れられて、息子に嫁が来た時点で交代するというパターンが多かったようだが、現在はその形も多少変化している。嫁が来ても姑が出来るだけ続け、嫁が育児に負われなくなる頃に交代するという家がかなりある。このように変わった事に関しては、「今の姑は若くて元気だから」という意見もあれば、「姑が、嫁に面倒なことをさせてはいけないと気遣っているのだ」とい

うものもあった。このような背景から、退会年齢はその家によって大分差が生じることになるが、遅くとも65歳には辞めて、その後は老人会に入ることになる。早い人は50歳代前半で辞めていく。辞める時期は集落によっても差があるようだ。

会員の年代別構成は、20歳代－3人、30歳代－24人、40歳代－60人、50歳代－55人、60歳代－11人である。20歳代が圧倒的に少なく、ほとんどが40～50歳代に集中していることが分かる（表－1）。たいていは1軒に1名加入しており、たまに2名の世帯もある。以前は1軒に2名入っていた世帯もかなりあったが、今では逆に1名も入っていない世帯も多くある。また、会合は姑が参加し、バレーボールなどの行事には嫁が出る、というように分担している家もある。

表－1 鉦打婦人会々員の年代別構成の比較（1988年・1999年）

		20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	計
1988年	人数	13	76	56	36	4	185
	比率(%)	7.0	41.1	30.3	19.5	2.2	100
1999年	人数	3	24	60	55	11	153
	比率(%)	1.9	15.6	39.2	35.9	7.1	100

会員は会長、副会長、書記、会計、それに農協婦人部長、婦人学級長が各1名ずついて、ここまでを幹部と呼ぶ。任期は2年である。さらに各集落（鉦打には10の集落が存在する）に支部長が1名と、役員（または班長と呼ぶ）が集落の大きさに応じて1～3名いる。こちらの任期は1年となっている。次に、これらの役員の決め方だが、少し複雑なので順番に見ていく。まず会長だが、今期は3分団から、来期は2分団から、というように会長を出す分団の順番が決められている。分団というのは鉦打の10の集落を4つに分けたもののことである（1分団－西谷内、古江、大平、2分団－河内、別所、3分団－鳥越、藤瀬、4分団－町屋、上畠、北免田）。会長があたっている年は、その分団の中から必ず誰かを出さなければならない。このやり方は1990年度から執行されているものである。こうすることで、同じ人が2期続けてやるというような事態を避けられるし、比較的スムーズに決まるという。それまではその年の役員が次期会長にふさわしいと思われる人の家へ何度も頼みに行っていたそう。しかし、たいてい断られるためなかなか決まらず、何か良い方法はないかと考えた結果、今のようなやり方となった。

副会長以下の幹部は、支部長がくじを引いて受けもつ集落を先に決め、その集落から話し合いで選出する（このくじ引きには会長を出す集落は入らない）。こうすることで、1つの集落から何人もの幹部役員を立てるようなことはなくなる。先ほども述べたように、このほかにも支部長と役員（班長）を出さなければならない。小さな集落では役員の負担は重く、それが嫌で早めに退会する人が後を絶たない。そのことはIV.で詳しく述べることにする。

役員があたるとたくさんの仕事が待っている。特に幹部と呼ばれる人たちはかなりの時間を婦人会の仕事に費やすことになる。まず、鉦打の幹部会というのが年に5回ほどある。他にはリーダー研修といって、中島町の各地区の幹部役員による、石川県内の施設見学が年1回ある。婦人会長は、中島町の会長会議にも出席しなければならない。年に11回ほどある。また、鉦打では毎年1月に新年会があり、これには幹部と支部長、役員が参加する。以前は和倉温泉などで1泊することもあったが、最近は町内の万葉倶楽部に日帰りで行くことが多い。

次に婦人会の活動内容について見ていきたい。大きなものから挙げていくと、5月の社会体育大会から始まり、8月の納涼祭、4年に1回行われる演芸祭と茶屋まつり、そして10月の敬老会などの行事がある。これらを壮年団などと協力して取り仕切る。具体的に説明すると、まず社会体育大会では、当日の点呼などの細かい仕事はもちろん、なるべくたくさんの人が参加するよう、事前に呼びかけるという仕事もある。納涼祭や社会体育大会、敬老会では、婦人会が「やんさこ踊り」を披露する。踊りの練習は毎年行われるということだ。また他には、県政バスと言う女性の知識向上のために始まったものがある。これは各地区で主催する行事であるが、県からバスを無料で借りることができるので、希望者を募り色々な場所を視察するという(表-2)。

Ⅲ. 婦人学級・農協婦人部

この節では鉦打地区の女性たちが関わる組織ということで、婦人学級と農協婦人部について簡単にまとめておく。まず婦人学級の方だが、参加対象者は鉦打地区婦人会会員で、実際の会員数は81名(1999年度現在)となっている。会費は年間1000円だが、行事に参加する際にその都度参加費用を払う。加入は自由で、「今年は婦人学級に入りますか」と役員が毎年聞いてまわる。ある加入者の話では、「毎回参加できるわけではないが、とりあえず毎年入っている。日程的に出られそうなときだけ参加している」ということだった。活動は年9回ほどで、その内の1回は必ずボランティア活動が入る。それ以外は、ぶどう狩りや生け花教室、介護教室、体力づくりなどが行われる。役員は婦人学級長、副学級長、書記、会計が各1名ずつおり、任期は2年である。婦人学級長のポストは、先に担当する集落がくじ引きで決められる。副学級長以下の役員は婦人学級長になった人が友人などをお願いする形となっている。婦人学級は鉦打地区内での活動である。中島町の他の地区でも同様の活動がそれぞれ存在している。

次に農協婦人部について見ていく。婦人学級の方は参加が自由なのに対して、農協婦人部は少しでも農業に携わっている家はほとんど強制的に入る形になっている。また、婦人学級が鉦打地区内の組織であるのに対して、こちらは中島町の組織と考えて良い。会費は年間500円である。

表-2 鉦打婦人会の活動（1999年度）

月	日	事業内容	場所
4	12	幹部会	鉦打公民館
	19	役員全体会	〃
	28	公民館運営協議会	〃
5	11	公民館合同打合せ会	〃
	16	美化運動	〃
	30	社会体育大会	鉦打小学校運動場
6	20	ソフトバレー大会	鉦打小学校体育館
	22	町バレー練習	〃
	～	(10回)	
7	18	町バレー大会	中島中学校体育館
	27	幹部会	鉦打公民館
8	6	やんさこ踊り練習	鉦打小学校体育館
	8	美化運動	鉦打公民館
	14	やんさこ総踊り（納涼祭）	藤津比古神社
	24	役員全体会	鉦打公民館
9	7	公民館合同会議	鉦打公民館
10	14	県政バス	金沢・加賀方面
	17	敬老会	鉦打小学校体育館
11	7	美化運動	鉦打公民館
	15	幹部会	〃
	29	町政懇談会	〃
	30	公民館運営協議会	〃
12	23	秀楽苑クリスマス会慰問	秀楽苑
1	16	幹部会	鉦打公民館
	22	役員新年会	万葉倶楽部
	23	美化運動	鉦打公民館
2	20	卓球大会	鉦打小学校体育館
		幹部会	鉦打公民館
	22	会計監査会	〃
3	5	定期総会 役員引継	鉦打公民館 〃

主な活動にはまず春と秋の共同購入運動が挙げられる。これは、通信販売のカタログ本のようなものが各家庭に回ってきて、その中にほしいものがあれば注文する、という形のものである。他にはグリーン・レディース・カレッジと呼ばれる活動が年に数回あり、じゃがいも掘りや、味噌づくり、ボーリング大会など様々な行事がなされている。このようにたくさんの行事があるものの、農協婦人部の行事の参加率は婦人会に比べて低く、ほとんど役員任せであると言う声も多く聞かれた。その背景には、婦人会の女性たちは婦人会の行事で手一杯であることや、婦人会を引退した女性たちは移動手段が無いと言って参加しようとしにくいことなどがあるようだ。また、農協婦人部長という役員を婦人会から出さなければならないことに関して、婦人会の方々は「ますます負担が重くなる」と不満に感じているようだ。

IV. 婦人会に対する女性たちの意識

この節では婦人会に対する女性たちの思いをまとめていきたい。婦人会に所属している女性たちの大半が、「婦人会はなくてはならない存在」と考えている。もしなくなればこの地区の発展は止まってしまうだろうという人もいた。しかしそう考えている反面、その婦人会を支えてゆく「役員」には、できればなりたくないという人がほとんどだ。この役員の問題は鉦打婦人会にとってかなり大きな問題である。役員を避ける理由は、仕事や生活に追われてなかなか参加できないから、と言うのがまず挙げられる。昔は農家の主婦が多かったこの地区も、今では50歳代位までの女性の大部分は勤めに出ているという。しかし、鉦打地区内には職場がないため、女性たちは中島地区を始め、七尾市、田鶴浜町、能登島町などへ出かけなければならない。そのため、どうしても朝は早く、帰りも遅くなってしまうのである。それでも、役員が回ってきた時には、なるべく多くの行事に出席するよう心がけてはいるが、役員になるのはできるだけ避けたい、という声が多く聞かれた。こうした時間的な問題に加え、精神的な理由で役員を避ける人たちもいる。特に婦人会会長は毎回なかなか決まらないという。昔この地区では、婦人会会長というのはオヤッサマの奥様がするような、いわば名誉職的な役割であった。その意識がまだ残っているからだろうが「私には不相応だから」と言って断る人が多いようだ。

実際、幹部役員になると町だけでなく郡や県の婦人会に関わることになり、時間も取られるし責任もある。こうした役員がまわってくるのが嫌で、たいてい50歳代で退会してしまうという。しかしその一方で、婦人会をやめてしまうと付き合いが減るので寂しいとも思っている。役員を経験がある人たちの話では、確かに大変だけどやりがいがある、皆で集まってわいわいやっているのが楽しい、ということであった。私が定期総会の打ち合わせを見学させて頂いた時も、和気あいあいとしていて、とても楽しそうだった。それにこれは個人的な印象だが、役員の人たちは皆若々しくてとても元気なのである。

さて、こういった話をしてくれたのは主に30歳代後半から50歳代の女性たちである。彼女たちはもう数年婦人会に所属しており、この組織のことはほとんど分かっていて、役員もある程度経験している人々だ。では、まだ入って間もない若い女性たちは婦人会についてどのような見方をしているのだろうか。先述の通り、婦人会に入る年齢は世帯によって多少差がある。40歳代になって、ようやく入ってくる人もいれば、嫁に来てすぐに姑と交代する人もいる。特に後者の場合は、最初は人の名前と顔が一致しないので、なかなかなじめず苦勞する人も多いようだ。この問題は通婚圏が拡大した現代の特徴の1つと言えるかもしれない。

婦人会以外で、若い既婚女性たちの地区での付き合いといえば、子供が通う保育園の母親同志の付き合いがある。そちらの方がお互いの年齢層が近いので気が楽なようだ。婦人会の方は一気に姑が増えるようで、若い子は大変かもしれないね、と言う人もいた。実際、入会したば

かりの頃はいやだなと思った、という声もあった。しかし、だんだん知り合いが増えていくうちに居心地の悪い場所ではなくなってくる。また、小さい集落では20歳代でも、支部長や役員（班長）が回ってくるという。20歳代で支部長を務めたという女性もいた。このように、婦人会という場所は若い女性たちにとって色々と気をつかう場ではあるが、人との縦のつながりが形成されるため、外から入ってきた女性などには特によい機会であるといえる。

ところで、婦人会を退会した人たちはその後どういった付き合いをしているのかということについても触れておきたい。まず、最も一般的な組織は老人会である。勿論これは女性だけの組織ではない。65歳から入会することができる。他には「生き生き教室」や、「福祉の日」と呼ばれる活動がある。鉦打公民館で行われている。生き生き教室は月1回、民謡教室やカラオケ、料理などをして楽しんでいる。福祉の日というのは月2回設けられていて、健康についての勉強会を行っている。これらは特に女性に限定しているわけではないのだが、今は女性の数が圧倒的である。年齢層は大体65歳から70歳代で、からだの元気な人たちが参加しているという。

このように色々な年齢層の女性に話を伺ううちに、昔と今では、女性にとっての婦人会の意味も大分変化しているということが分かった。昔は（今から30年ほど前）、毎日、田や畑の仕事や家事、育児などに追われる女性たちが遊べる唯一の場所が婦人会であり、婦人会による行事であった。今は地区のほとんどの女性が勤めに出ているという。会社に勤めていれば確かに苦労はあるだろうが、婦人会に行かなくても外に楽しい集まりの場があるとも言えよう。また、今は一家に何台も自動車がある時代なので、どこへでも容易く遊びに行くことができる。従って、婦人会やそれを通じた行事などは、昔に比べると魅力的なものではなくなってしまったのである。そうした意識の変化が会員数の減少をさらに招いているのであろう。

さて、話は変わるが、私が見学させていただいた3月の婦人会総会で次のような話がでた。それは「婦人」という言葉についてである。最近「婦人」という言葉を「女性」に変更しようとする動きが上の方であるそうなのだ。現に鹿島郡では「鹿島郡女性団体協議会」という名称に変わったという。県の方は全国的に変わらないと変えられないと言うことで見合わせている。町は今後検討の方向へ向かっている。そういう問題について鉦打地区の人たちの反応は以外と消極的なものであった。「そんなこと別にどちらでも良いのに」という意見が多く、中には「婦人会の球技大会で人数が足りなかったときに、婦人ではないから（結婚していないから）といって未婚の子達が参加してくれなかったけど、女性という言葉ならその言い逃れは出来なくなるねえ」という意見もあったが、いずれにしろ「婦人」という言葉に対する抵抗感は特に持ってはいないようだ。「婦人」という言葉云々よりも、会の存続そのものの方が今は切実な問題だということなのかもしれない。

V. お わ り に

冒頭でも述べたように、調査当初は婦人会は裏方に徹しているとばかり思いこんでいたが、女性たちに話を聞く回数が増えるたびに、それが私の思い過ぎだったことが明らかになっていった。鉦打の婦人会は想像以上にパワーがあった。「婦人会は元気。パワーということでは壮年団より強いかも」という男性の言葉も聞かれたことから、男性もその点は認めているようだ。私は今回婦人会にテーマを絞ったので、壮年団の方は詳しく把握できていないのだが、「いずれは婦人会の方が強くなったりして」と言いながら笑う彼女たちを見ると、必ずしも冗談ばかりでもないのでは、とってしまった。

3月5日には婦人会総会、そして婦人学級閉級式での打ち上げ会に参加させていただいた。そこではみなさんの本心をたくさん伺うことができた。確かに元気な婦人会ではあるが、以前に比べれば若い人の数も減り、縮小してきているのは他の地域と同じである。少なくともその会合に出席していた人々はそのことに対して、「なんとかしなければ」という危機感を抱いているようだ。

印象的だったのは、そうした話題になったときに、あんたはどう思うか、と意見を求められた人たちが皆、しっかりと自分の意見を述べていたことである。これは日頃から婦人会のことを気にかけているということの表れではないだろうか。

私もし何か意見を求められたとしたら、やはり「若い女性に魅力的な婦人会づくり」を提案するであろう。若い人たちが入りやすい雰囲気（環境）をつくるとか、なるべく近所の若い人たちに声をかけて、誘うようにするなど、こちら側から積極的に働きかけるというのはどうであろうか。とにかく会員数（特に20歳代～30歳代の女性）が激減しているので、それを食い止めなければならない。もしそれが出来れば、役員が多くまわって来るのが嫌で早めに引退してしまう人たちを留まらせることも可能になるのだが、なかなかそう上手くは進まないのが現状かもしれない。

確かにこうした人数の問題や、役員の負担など抱える問題はいくつもあるが、私は彼女たちの明るさがそうした不安を打ち砕いてくれるように思えてならないのだ。勝手な期待かもしれないが彼女たちはきっと、様々な課題を乗り越えていけるであろう。鉦打の婦人会がこれからも地区の発展に貢献してくれることを願う。